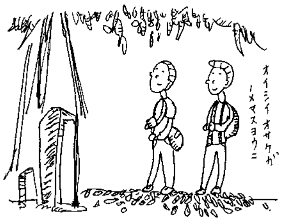
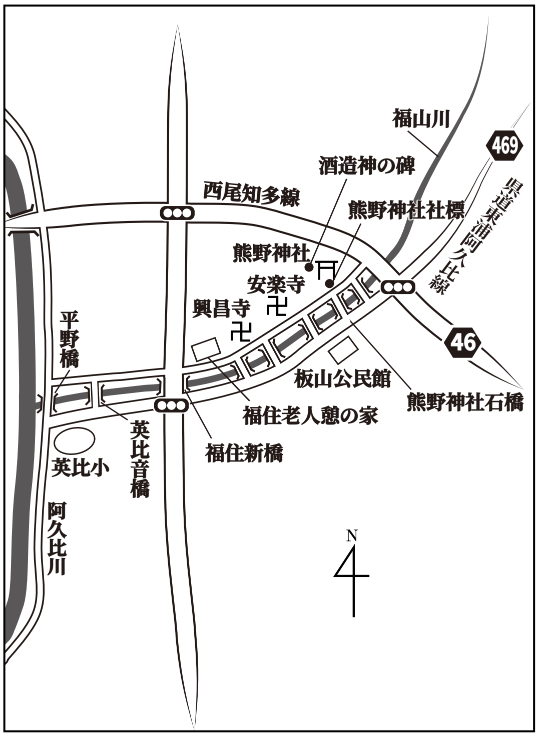
シリーズ
阿久比を歩く101



あぐいぶらり旅
石造物を巡る（板山・福住・白沢コース②）



熊野神社入り口に立つ“社標”

　友人と二人で板山地区の熊野神社を訪れた。文化財調査報告ではこの神社からは三つの石造物が紹介されている。順番に見ていくことにする。

　道路と境内の間を流れる福山川に架かるのが「熊野神社石橋」である。調査報告では「町内の神社仏閣で、石橋のあるのは当社と西隣の安楽寺だけである」と解説される。

　『阿久比町誌資料編四』によれば板山郷土史の中に、「石橋架設　于時明治三十六年四月」と記録が残されている。現在の石橋は河川改修に伴い川幅が広がり、昭和五十四年三月に完成したものだ。

　幅約二・七メートル、全長約七・五メートル、下部にコンクリート、上部に石が敷かれた二重構造。改修前から石橋として使われていた御影石が敷き詰められている。

　「『この橋、渡るべからず』と立て札があったら、君はどうやって神社へ行きますか?」と友人に問い掛ける。しばらく考えた後友人は、東へ少し歩いた場所に架かる、コンクリートの橋を渡り始める。大きな声で「この橋を渡り、川沿いの細道を歩けば神社に着けますよ。どうですか」と友人は私に手を振る。「そうだね・・・」。確かに間違いではない。私は、橋(はし)と端(はし)を掛けて、橋の端の部分を通らず、真ん中を渡るだろうと期待していたが、さすが友人。裏切らず笑わせてくれる。

　私は石橋の真ん中を渡り、友人の待つ「熊野神社社標」の前に進む。高さ約三メートル、正面に「村社熊野神社」、正面左には「熱田神宮宮司正五位角田忠行書　明治四十一年四月建之」と記される。角田忠行氏は幕末の勤王の志士の一人で、島崎藤村の小説『夜明け前』の登場人物、暮田正香のモデルであるといわれる。

　角田氏を明治三十四年に熊野神社に招いた記録が残る。社標の文字を書いたのはそのゆえんだろうか。

　最後に「酒造神の碑」を見た。酒造神の松尾皇太神がまつられる。境内北の小高い場所にひっそりと立つ。うっそうと木が生い茂る森の中だが、木漏れ日が石碑を照らす。

　農閑期に〝杜氏(とうじ)〟として酒造りに出掛けていた時代、この碑に健康などを願い、各地へ出掛けていったようだ。「健康といえば、酒の神様なので〝痛風〟にならないようにと願ったらどうですか」と友人に言われたので、私は素直に手を合わせた。

福山川に架かる“石橋”